

いんたびゅう 今、この人に Interview

ガリーナ シェフツォバさん

基本的に人間の心はどこでも同じ。
日本の戦後や震災後の復興を研究して今の戦争が
終わったあとの都市の再生に役立てたいですね。



■日本に興味を持ったきっかけは何だったのですか？

小学生の頃、松尾芭蕉の俳句を翻訳した本を読んだことです。短い言葉で17世紀の日本の風景や風、匂いまで表現されていて、今は存在しない、別の世界に簡単に行けるのが、すごく面白いと思ったのが日本との最初の出会いです。大学では建築を学びましたが、建築家になるより研究を続けたいと思っていたところ、キーウにある日本センターからの招待を受けて来日し、東京で学びました。そのとき京都や奈良を訪れて日本の庭に興味を持ち、日本で研究しようと思い、奨学金を受けて2003年に近畿大学に留学しました。そこで日本の木造建築について研究したあと、ウクライナに戻り、キーウ国立建設建築大学で木造建築の歴史について教えるようになりました。

■実際に来日された時の日本の印象はどうでしたか？

周りのみんなから日本は特別だと聞いていましたが、私は来日前に他の国もたくさん訪れていたの、そんなに大きな違いは感じませんでした。もちろん、住んでみるといろんな違いはありますが、基本的に人間の心はどこでも同じ、と私は思っています。大阪に3年、京都に1年、東京に1年半ほど住み、滋賀に初めて来たのは2014年ですが、この場所がすごく気に入りました。私は俳句も作っていますが、琵琶湖のそばならいつでも俳句が作れるのも好きなのところです。

■ウクライナと日本の木造建築について、どのような点に注目されたのですか？

それぞれの共通点に注目して研究しています。構造が違いますが外観は似ているし、雰囲気や祭りをする場所であるという点、建築の細部や内部構造もよく似ています。古い木と線香やロウソクが合わさった匂いも似ていますし、内部が吹き抜けになっていて高い空間があるところは、禅宗のお寺とも共通しています。実は、ウクライナの西部は地形や気候が日本ととてもよく似ています。家は校倉造で、屋根の作り方や形、使う道具にも似たところがあります。

■今年4月に、これまでの研究成果をまとめた本を出版されたんですね。その中では木造教会の魅力を解説されています。

ヨーロッパの教会というと石造がイメージされるかもしれませんが、ウクライナにも木造教会が多くあります。木造建築は、まさに森がないと造れません。木造教会はウクライナ以外の国にもありますが、ウクライナは他のヨーロッパの国と違って、今も新しい木造教会を造っています。ソ連時代に50%以上の木造教会が破壊されてしまいましたが、そんな大変な時期を乗り越えて、文化が生き残り発展が続いています。それはそのまま、民族の心です。また教会は建物だけでなく壁画やイコン（聖画像、聖像）、刺繍、タペストリー、彫刻など、美術と文化の中心でもあるんです。

■ロシアによるウクライナ侵攻で多くの建物が被害を受けていますが、木造教会についてはどのような状況でしょうか。

戦争が始まってすぐ、文化財の建物2棟が焼失しました。それ以外は今のところは被害は少ないです。ロシア軍は南部と東部から侵攻していますが、南部はそもそも木造教会があまり造られておらず、東部はたくさん木造教会があったのですがロシア革命のあとソ連によって多くが破壊されたため、少ししか残っていませんでした。ただ、この先はどうなるかわかりません。特に校倉造の建物は、直撃を受けなくても近くにミサイルが落ちたら振動で崩れてしまいます。そうした被害も出ています。

■研究のかたわら、陶芸にも親しまれているそうですね。陶芸を始めたきっかけは何だったのですか？

10年前の大津祭のとき、この辺りで陶芸のワークショップがあったので体験してみたのがスタートです。それが、今所属している「てんびん坊陶芸サークル」です。ここは、ただ陶芸をするだけではなく、みんなで一緒にどこかへ出かけたり、居場所として過ごせたりと、とても落ち着くコミュニティの1つで大好きです。本を出版したあとに三井寺で開いた写真展の準備でもみなさん協力してくれました。

■今後、どういう研究や活動を進めたいと考えておられますか。

日本は戦後どのように街が復興したか、また、東日本大震災のあと東北はどのように復興していったか、ということに興味を持ち、資料を集め現地調査に行きました。ウクライナも空爆で多くの都市が破壊され

● プロフィール ●

ガリーナ シェフツォバさん／
ウクライナ出身 大津市在住
キーウ国立建設建築大学教授
ウクライナ国立芸術建築アカデミー大学院を修了。大阪外国語大学で日本語を学んだ後、近畿大学で日本の木造建築の研究を行う。2013年キーウ国立建設建築大学で建築学博士を取得し、2014年より現職。京都大学、東京大学の客員研究員も務めてきた。2023年よりウクライナ避難民として大津市に在住。日本とウクライナを行き来しながら研究を続けている。

主な著書／
『多様な世界 ウクライナ・日本木造建築』
(グラフィック出版、2006)
『紅色の陽』(ドニエプル出版、2023) (ガリーナさんが主宰するキーウ俳句クラブで戦争中の俳句を集めた句集)
『未来に残したい ウクライナの木造教会』
(エクスナレッジ、2025)



▲ウクライナと日本の木造建築の比較 (ガリーナさんの著書『多様な世界 ウクライナ・日本木造建築』より)。



ガリーナさんの陶芸作品。季節や風景からヒントを得て作り、同時に俳句を作ることもあるという。

◀陶芸サークル「てんびん坊」は会員が自由に使えるスペースがあり、ガリーナさんはそこで夕方から夜までゆっくり過ごすのが好きだという。



たので、戦争が終わったあと、この研究が役に立つと考えています。特に東北では人々がこの震災を忘れないため、津波の危険や被害を減らすための知恵をみんなに知らせることを大切にしています。こうしたことをテーマに論文を書いて、母国の再生に役立てたいですね。